

本当のところを言うと、自然を見ることのできる大人はほとんどいない。たいていの人が太陽を見ていない。少なくともごく表面的な見方しかしていない。太陽は大人のばあいにはただ目を照らすだけだが、しかし子どものばあいには目と心の中に射しこむ。

自然を愛する人は、内的な感覚と外的な感覚とがつねにぴつたりとたがいに適合し合っているひと、幼いころの精神を大人になつてからも失わずにきたひとだ。彼が天や地とのあいだに結ぶ交わりは彼の日常の糧の一部になる。自然のままに出れば、実際には悲しいことがある。いつても、激しい喜びがそのひとの全身を走る。自然が言う——彼はわたしの産んだ子だ、見当ちがいな悲しみにあれこれ悩まされてはいるが、それでもきつとわたしのことを喜ぶはずだ。太陽や夏ばかりでなく、ひとときが、めぐりゆく季節のひとつひとつでさえ、それぞれに喜びを寄進してくれる。風ひとつない真昼からこのうえなく不気味な真夜中まですべてのひととき、すべての変化が、それぞれに異なる精神の状態に照応し、それを權威づけているからだ。